

2009年6月9日

出張報告書

京都FD開発推進センター

深野 政之

日程：2009年6月6日（土）～7日（日）

行事名：大学教育学会第31回大会

出張先：首都大学東京（東京・八王子市）

参加者：深野、川面、井上、平井

1. 基調講演「大学教員はいかなる意味で教育者か」（寺崎昌男先生）

まず、大学教員の職務としての「教育」に関する専門性を明確にする必要があるとして、概略、以下の内容が多くの例証を挙げて話された。

- ・アーネスト・ボイヤーによる「スカラシップ」の定義、ケン・ベインによる「ベスト・プロフェッサー」の概念、カール・ノイマンによる「学校教授学の伝統とよき講義」を例に挙げ、アメリカ、ドイツの大学における教授学の伝統を学ぶ必要があること。
- ・大学院教育の改善が必要であるとして、大学院教育の中に「大学教員養成」の機能をきちんと持たせるべきであり、大学教員を採用する際には、従来の研究業績一辺倒の評価ではなく、教授力の評価を取り入れるべきであること。
- ・授業者としての大学教員は、初・中等学校の教育現場での実践や、教職課程教育の成果を学ぶ必要があること。

その上で、大学教員が持つ研究者としての責務と、授業創造や学生（生活）指導のための時間が対立する場面があるが、この課題を大学教員は乗り越える（両立する）必要があると強調された。このためにも、大学教員には初・中等学校の教員よりも大きな（教育面での）裁量の幅が認められており、大学教員は大学教育改革を推し進める主体となる責任があるとされた。

2. シンポジウム「大学教員のパフォーマンス評価」（6月6日）

岡山大学、首都大学東京、東海大学+立命館大学、北海道大学における教員の業績評価制度が紹介された。それぞれの大学がいくつもの多面的な指標を使って評価システムを作り上げていることが報告されたが、特に教育業績の評価は難しく、いずれの大学でも課題となっていることが明らかとなった。

会場との質疑応答では、特にトップダウンで組織改編、制度導入を行なった大学が実践面で苦慮していることや、個人の業績評価と組織のパフォーマンス評価の問題が論点とされた。

3. その他

1日目のラウンドテーブル「今なゼリベラルアーツ？」で発表者の1人として報告、2日目は「ハーバードのカリキュラム改革：本格実施に向けて」と題して個人研究発表を行なった。この他、大会参加者と研究交流やFDに関する情報交換を行なうことができ、有意義な出張であった。

以上